

## 岡田小1年生の「昔の遊び」授業に名人さん33人

お手玉、あやとり、おはじき、こま、けん玉、将棋、かるたで昔取った杵柄

2月15日（月）に岡田小学校1年生の生活科の授業「むかしのあそびにちょうせん」で、地域の大人たちが「お手玉」「あやとり」「おはじき」「こま」「けん玉」「将棋」「かるた」を教えました。



岡田小地区社協がすまいるサポーターやシニアクラブに呼びかけて集まったのは、39歳から91歳までの「名人さん」33人とリポーター4人。子どもたちは1組12～16人で7組に分かれ、自分の覚えたい遊びを1人2種目ずつ教わりました。遊びが終わった後、名人さんたちは子どもたちと一緒に学校給食をご馳走になりました。

岡田小学校の昔の遊びの授業には、これまで牛久市社会福祉協議会を通じて、校区内のシニアクラブから名人さんが派遣され

ていましたが、これからは岡田小地区社協が名人さんに集まってもらう役割を担当することになりました。



### 「こま」 こまのひもが巻けません！

今回の遊びのなかで、一年生が最も苦勞していたのは、こまでした。

一年生が小さな手で一生懸命ひもを巻こうとしますが、なかなか上手く巻けず、



ひもが崩れてしまうのです。「ひもの先を水で湿らせて、それをこまに押さえて巻き付けるんだよ。」と指導員が説明します。くやしそうに、何度もチャレンジする姿がいじらしかったです。指導員は、ひもが巻けない子には巻いたこまを手渡し、そのときに持ち方も教えていました。

どうにかひもが巻けると、今度は、こまを回す動作です。「水平に回すんだよ。」と説明する指導員。一年生は不思議な顔をしています。指導員は手ぶりを交えて「水平に」と繰り返します。一年生もやっとわかったようです。でも、回してみると、横向けに転がってしまいます。なかなか、上

手く回ってはいけません。



こまが回ったときの弾けるような笑顔。みんな、いい笑顔です。「名人さんに赤ちゃん指を使うと上手に回せると教わりました。」と述べる子もいました。

### 「お手玉」 お手玉はいろんな遊び方ができる！

最初にお手玉を2個ずつ持たせて、投げ上げることから練習開始です。次に、一つ投げ上げてキャッチしては、もう一つをとという動作です。みんな、一つ目はうまくキャッチできても、二つ目からは焦ってしまってリズムがうまく作れません。でも、「もしもしカメよ」と歌いながらチャレンジする子もいました。



指導前に、「久しぶりにお手玉を持ったわ。メガネがないと見えないわ。」などとぼろぼろお手玉を落としていた指導員たちも、一年生

の前では3つのお手玉を軽々とあやつっていました。忘れたなんて、なんのなんの。体は覚えていたのです。



名人さんみたいにうまくなりたーい

上手くできない子は途中で飽きてしまいそうです。そんな子たちには、高く投げて、手をあてて落とす遊び方や、お手玉を頭の上にのせて歩けるかななどをちょっとやらせてみたり。無理強いはいらないけれど、できる遊び方で楽しめばよい。そんな昔の路地裏のようなお手玉コーナーでした。

### 「あやとり」 魔法のようなあやとりに興味津々！

どの遊びでも、指導員たちは、一年生にわかるように、言葉をつなぎ、心を配っていました。本来、あやとりは一対一で教え、

教わるのが理想的な遊びでしょう。今回は一年生16人に、4人の指導員という体制でした。しかも、保育園であやとりをした



経験がある子と、したことがない子とでは大変な差がありました。経験がある子は、どんどん難しい技を教わりたがります。ど



あやとり 好きになっちゃた

一方、あやとりとしたことがない子は、「中指で糸を取ってきて。親指と小指はそのままで。」なんて言われても、もうどの指が動いているのかわからなくなってしまいます。指導員は、文字通り、手取り、糸取

の子も「ほうきができた。見て。」とうれしそうです。



ネネネ、僕にもやらせて

りでした。しかし、一本の糸で遊ぶあやとりは、魔法のようなのでしょうか。男の子たちも真剣な表情でした。また、簡単なあやとりでお餅つきの動作になる二人遊びも、友達同士で楽しそうでした。

### 「おはじき」 おはじきなのに、はじけません！

指導前の疑問は、「一年生はおはじきをはじけるのか？」でした。その懸念は的中しました。今の子どもはおはじきをはじけないのです。指導員は、おはじきをはじく練習をさせる？いいえ、そんなことはしませ



おはじきって結構むずかしいね

誰かがおはじきを上手く当てて獲得できると、歓声が上がる。次の子が当てられなくても「惜しい」とまた歓声が上がる、といった調子で、大いに盛り上がりました。

ん。とにもかくにも、子どもたちにはおはじきという遊びを知ってもらい、楽しむことに専念してもらいました。親指や人差し指ではじけない子は、人差し指でおはじきを動かすことで善しとしていました。



床の方が滑ってやりやすいね

なかには、他のおはじきに当てないようにと自分の体勢や位置を変えて、工夫する子も現われ、指導員も驚くほどでした。指導員からは「時間を持て余すのではないかと

心配だったが、楽しんでもらえて、自分も楽しくて、来年もぜひ来たい。」という声が

ありました。

### 将棋——想定を超える真剣さ

「小学校1年生に30分で将棋を覚えさせるのは難しいのではないか」当初はみんなそういう意見でした。実際始まってみると、名人さんがあまり一生懸命教えるものだから、キャパシティ・オーバーになった子どもが泣き出す一幕もありました。後で「ああ、そういう子が後で強くなるんだよ」と誰かが感想を述べました。

まだ1年生でも、教わる種目に将棋を選ぶだけあって、子どもたちはみんな「強く



女の子だって将棋やるよ

なりたい」という気持ちが強いようでした。子ども2人が束になって名人さんに挑戦したケースでは、子どもの1人があまりよくない手を打つと、別の子どもが「そんな手を打って」と悔しがる場面もあったそうです。

「あのくらい一生懸命になるのなら、昔の遊び授業は年1回ではもったいない。土曜カップ塾で教えたらどうだろう」という声もありました。



これ、どう動かすの?

### けん玉——コツはやっぱり教わって

けん玉は、ほとんどの子どもが初めてのようでした。まず持ち方から教わり、大皿に乗せる練習をしました。みんな一生懸命黙々と乗せようと試みますが、玉を横に振ってしまうためなかなか乗りません。中には「大きい玉が良い」「他のけん玉が良い」と言い出す子どももいました。

何回も何回も挑戦し、ボールを真下に静止させてから上げる・ボールを真っ直ぐ上に上げる・ボールを持ち上げすぎない・ボ



けん玉、初めてなんだ





のっかったよ！2回目だよ！

ールを皿に受けるとき膝を曲げて衝撃を和らげる——というコツが身につくにつれて、乗るようになりました。

初めて乗ると「乗った」「出来た」と大喜び。そのうち「これで5回目」とか、小皿に挑戦する子どもも出て来て、楽しい雰囲気広がっていきました。けん玉は、まず名人さんに教わって早くコツを身につけることが、楽しくなるコツだと言えそうです。

### 「かるた」ってこんなに活気のある遊びだったっけ？

「かるたはお正月に静かに遊ぶもの」——岡田小1年生の「むかしのあそびにちょうせん」は、かるたのそんなイメージを完全に吹っ飛ばす活気のある授業でした。

14人を5組に分け、3人1組でかるたを取り合います。それぞれの組に名人さんが審判として付きます。歌が読まれると「ハイ」と言って取りますが、この「ハイ」がとにかく元気なのです。5組で一斉に「ハイ」と言い、遅れて手を出す方も「ハイ」と言いますから、会場全体にものすごい活

気がみなぎるのです。

A4判の大型かるたを全員で取り合ったときは、「走ってはダメ」と言われていても、1枚のかるたに数人が一気に、ダイビングのように飛び込みます。誰が最初に手を付けたのか、審判の存在の重要性がよく理解できました。

子どもたちがかるたにこんなに夢中になるとは——認識を改めさせられた授業でした。



かるたは大好きなんだ



こんなおおきなかるたもあるんだ